平家物語

福井県には、何らかの理由で源平ゆかりの地がいくつか有ります。

挙げると切りが無いのですが、・・・・代表的なものを数カ所パパンパン記載します。

平正盛(平清盛の祖父)は無名の隠岐国守でしたが、最高権力者の白河院との関係を築き、若狭国守に抜擢されました。ここに平氏と越前・若狭との関係がはじまります。正盛は若狭守を重任し、後継者である平忠盛(清盛の父)も1120年に越前守となりました。保元・平治の乱を経て平氏の台頭が進み、越前を平重盛(清盛の息子)家、若狭を平経盛(清盛の異母弟)家と、越前・若狭ともに平家が独占的に保持しました。

しかしその後、後白河法皇と平氏の対立が表面化。平重盛の知行国(皇族や上級貴族，寺社等に一国の支配権を与え、その国からの収益を得られる)である越前を法皇が取り上げたこと等から、平清盛はクーデターを起こし、反平氏の貴族を大量に処分。越前国は平家一門が取り戻します。しかし世間では徐々に平氏への不満がたまり、1180年には以仁王が平氏追討を決意したことにより反乱は全国へと広がり、平家は滅亡へと進んで行きます。

源平合戦の中でも重要な人物である木曾義仲(源義仲)は源頼朝・義経の従兄弟にあたります。「源平盛衰記」や「平家物語」でも描かれている「火打合戦」の舞台である福井には、ゆかりの地がいくつも存在します。また「平家物語」の「実盛最期」に登場する、木曾義仲の武将 手塚光盛に討たれた斎藤実盛は越前出身とされています。

源義経の軍記物である「義経記」には、特に平泉寺が「平泉寺御見物の事」という項において「あの有名な平泉寺を拝みたい」と弁慶と共に立ち寄った場面が描かれています。

今庄宿の背後にある通称愛宕山に平安時代末期頃に築かれた山城があります。

源平合戦の最中、寿永2年(1183)の木曽義仲(源義仲)と平家の戦いの際に、平維盛を迎え撃つ為に仁科守弘に命じ築城。平家物語の巻第七「火打合戦」は「木曾義仲、越前国火打が城を構える」から始まっています。北陸路から攻め入ろうとした義仲に対し、平維盛の10万の大軍が押し寄せてきましたが、義仲は日野川をせき止め、人工湖を造りましが、義仲側に付いていたはずの平泉寺長吏斉明威儀師の裏切りにより堰が切られ、山城は落城しました。

敦賀湾を一望する小高い山にある金ヶ崎城跡。様々な時代の逸話がありますが、平安時代末期源平合戦の時代に、平通盛が北陸で勢力を持つ木曾義仲に対抗するため城を築いたのが最初と言われています。

祇王とその妹の祇女が住んでいたと伝わる場所が、西藤島小学校の隣にあります。

祇王祇女は平家物語にも登場する白拍子であり、平清盛の寵愛を受けていましたが、清盛の心は別の白拍子である仏御前に移ってしまい、祇王は館を追い出されてしまいました。その際に障子に書き残した「萌え出づるも枯るるも同じ野辺の草いずれか秋にあわではつべき」という歌が石柱に刻まれています。また、近くにある児童公園も「祇王公園」という名前が付けられています。

「日本百名山」荒島岳から流れ出る高さ100㍍に及ぶ三段の滝。

滝の名は平清盛に愛され、舞の名手として、平家物語にも登場する「仏御前」がこの滝で髪を洗ったという伝説に由来しています。

剱神社は1161年に平清盛によって焼かれてしまいましたが、1164年に清盛の嫡男である平重盛が社殿を復興し、境内の小松建勲神社には平重盛が祀られています。

旧宮崎村には、

「これやこの ゆくもかえるも別れては 知るも知らぬも逢坂の関」の一首で有名な蝉丸の話が伝わっています。諸国を流浪の果て、越前に来て陶の谷にたどり着いた蝉丸は、一軒の農家に滞在中に病気になりこの地に果ててしまいました。蝉丸の遺言どおりこの地域に墓を建てました。

蝉丸は生没年は不明ですが、平家物語には「延喜(=醍醐天皇)第四の王子蟬丸」という記載があります。

代表的なものをお話しました。